

「印象派美術館」での平松礼二展の開催は、日本画界に久しくなかった大きなニュースです」と、今回のイベントを高く評価しているのが、箱根・芦ノ湖成川美術館館長の成川實氏である。

成川美術館は、戦後の現代日本画約4,000点を収蔵する日本画専門の美術館。公立の美術館とは違い、成川實氏というひとりのコレクターの目節によって選び抜かれたコレクションは、他では見られないユニークな美術館コレクションを形成している。その中でも、平松礼二作品は成川美術館のコレクションを特徴づけるひとつの柱として、名品が多く収蔵されているのだ。

「これまで日本画家がフランスで展覧会をする場合、だいたい日本からの持ち込みが多かったのだと思います。しかし、今回はフランスからの要請で、しかも全作品が美術館の買い上げになると聞きます。つまり、平松作品がヨーロッパの美術史の中で正当な評価を受けたという事です。

平松先生のおつきあいは、もう30年以上になりますが、今回、あらためて先生の作品を見てみると、実は外国人に好まれる要素が多いことに気づかされました。

例えば構図をみても、写生を元にしませんが、本画では風景を完全に心に取り込んで、全く独創的な風景にしてしまう。また、色彩は明るく、かつその印象派絵画と同様の輝きを纏っているようです。

何よりも心を打たれるのが、その制作



箱根・芦ノ湖

成川美術館館長・成川實が語る 平松礼二の「日本画力」

への姿勢です。先生は、とにかく大きな作品を描くことが好きで好きで……。まだ作品が売れていない若い頃でも次々と大作を描いてきました。また、細部の描き込みには、苦勞を惜しまず、よくぞそこまでというほど、作品に没頭していいんですね。

そういう姿勢だからこそ、作品数がとにかく多い。並の作家なら、「作品数が多いと値段が下がるから」と躊躇しそうなものですが、平松先生にはそういう発想は全くなく、刀鏝となる今もその制作意欲が衰えることはありません。

海外のマーケットで評価されるには、ある程度まとまった数の作品が必要になります。平松先生の場合はそれに例してはクリアしていませんから、海外での今後の動きに興味がありますね」と。

さて、成川美術館収蔵品の中核に山本丘人の大コレクションがあることは広く知られているが、その本質にあるのは「新しい日本画の創造」である。

「日本画は、平安時代の『やまと絵』の伝統を継承しながら、国教化していく現代社会の複雑な空気を吸って、芸術として深化していくべきだ」という成川氏の思いがそこにある。それは山本丘人からはじまり、平松礼二（トツ女）が一本の太い軸となり、成川美術館のコレクションという形で私たちの前に姿をあらわす。「平松先生の作品は、独創的な構図、イメージの拡張、色彩感覚など、様々な観点から新しい日本画といえるものです。それがきっかけで海外で評価されたことを、私たちは大きく誇る必要があるのではないうでしょうか」と成川氏は続けた。



「夕の池すいれん図」2012年 90.9×65.2cm
箱根・芦ノ湖 成川美術館蔵